

「敵を愛する」ことについて

「あなたがたも聞いているとおり、 『目には目を、歯には歯を』と命じられている。 しかし、わたしは言うておく。 悪人に手向かってはならない。 だれかがあなたの右の頬を打つなら、 左の頬をも向けなさい」	「あなたがたも聞いているとおり、 『隣人を愛し、敵を憎め』 と命じられている。 しかし、わたしは言うておく。 敵を愛し、 自分を迫害する者のために祈りなさい。」
--	---

マタイ5章 38-39節, および, 43-44節

1. 聴くことと赦すことの存在論

大学教員であったとき—とくに、4回生最後のゼミ日や結婚式の祝辞の場などで—以下のような話しをするよう心がけていた:

「より良い関係性を他者と築き、より良く生きたいと願うのであれば、
次の2点を意識すると良いかもしれない。

1つ目は、**聴く**ということ。

もう1つは、1つ目よりも実践するのがずっと難しいけども、**赦す**ということ」

1つ目の聴くという行為は、相手の言葉を「耳を澄ませて聴く」ことに始まり、相手の「**心の声を聴く**」、そしてそれは、自らの「**良心の声を聴く**」というところにまで射程が及ぶ。

他者とより良い関係性を築きたいのであれば、「言葉を発する」こと以上に、「聴く」という行為を重視しなければならない、という自らの想いに基づいている。

もう1つの赦すという行為は「相手の行為を許可する=allow」ということではなく、「相手の過ちを赦す=forgive」という意味内容である。

「赦さない」ことで「怒りや恨み」に囚われたまま生きることは、不自然で不自由な状態であり、したがって、自らの存在を愛し、慈しむことが出来ていない状態である。

それゆえ、「**自らの存在を本当に大事にしたい**」のであれば、相手の過ちを赦した方が良い、という想いであって述べていた言葉である。

そして、この「聴く」と「赦す」という2つの行為には、「**自己と他者の存在を尊重し、愛する**」という理念が通底している。

2. 「**赦す＝敵の存在を尊重し、愛する**」ことの難しさ

しかし、上記の理念を頭では理解しえても、「**赦す**」ことの実践には様々な困難を伴う。

とりわけ、自らの存在に大きな危害が加えられ、もしくは、近親者や親友、そして、大切な仕事仲間に大きな危害が及んだ場合がそうではなかろうか。

このような場合、「**危害を加えた相手＝敵**」を赦し、その存在を尊重することは極めて難しい。

「**危害を加えた相手＝敵を愛する**」に至っては「**危害を加えられた側の気持ちがお前に分かるか**」という具合に一怒気をもって一蹴されるかもしれない。

こうした難しさを前に、「**危害を加えた相手＝敵**」を赦すことはそもそも可能なのか、という問いに対し、危害が加えられた側の自然な心情として、通常、そこには「**ある種の条件**」が要される。

それは、「**危害を加えた相手＝敵**」が良心の声を聴き、「**危害を加えた事実に向き合っているか**」、あるいは、心から向き合っていないくとも、最低限、「**そうした姿勢だけは見せようと努めているか**」、という点に集約されるであろう。

であるなら、この種の「**赦しの条件**」が満たされる限り、赦すことの困難性は軽減されうる。

しかし、赦しの真の難しさは、こうした「**赦しの条件**」が満たされない場合にこそある。

3. 「過ち」の原理的な潜在性と超越的視点からの「赦し」

立場を換えて、「危害を加える＝過ちを犯す」側から考えてみる。

私を含め、人は、往々にして、自らが「過ちを犯した」事実のもとより、自らが「人として原理的に過ちを犯さざるをえない存在である」という事実に向かい合うことを躊躇う傾向がある。

なぜなら、こうした事実は単に「不快である」のみならず、「自らの現実存在の確実性が脅かされる恐怖や不安」がその事実に否応無く付きまとうからである。

しかし、これらの不快や恐怖・不安以上に、当人の**知的誠実性**が勝っている限り、「私を含む人間は原理的に過ちを犯さざるをえない存在である」という事実だけは認めざるをえない。

それゆえ、ある超越的視点—絶対的に善なる立場—からすれば、自らが過ちを犯す存在である以上、他在の過ちを赦す必要がある、ということにもなる。

それがたとえ、「赦しの条件」が満たされていない場合であったにしても、である。

4. 「敵を愛する」ことは屈服ではない

もっとも、「目視しえない超越的視点など私は信じていない」という声もあろう。

また、「人が他者に対して及ぼす危害＝過ちの程度」にも大きな差異がある。

それゆえ、「多大なる実害を加えた相手＝憎き敵」がその事実に向き合うそぶりさえ見せていない場合、「そうした憎き敵の存在を尊重し、愛する必要などあろうか」という意見があることも十分に理解しえる。

しかし、こうした理解にあってなお、「敵の存在を尊重し、敵を愛する」ということは、敵のためではなく、むしろ、**自らの生の尊厳を本当に大切にするためにも、せめて頭の片隅に置いておくのが良いのではないか**、というのが私見である。

そして何より、愛敵は、白旗を掲げて敵に屈服することや、敵に服従し、あるいは、敵におもねる、ということでは決してない、という点だけは強弁したいのである。

5. 責任倫理と「赦す＝敵を愛する」ことについて

怒りや憎しみの感情は人の眼を曇らせる。

怒りに身を任せ、敵を憎んだまましていると、「**危害が発生した構造(バックグラウンドメカニズム)**」が見えなくなり、誤った対応を採ることに繋がりかねない。

それゆえ、危害が及ぼされた側が弱っているときほど、理に適った、正しい対応をするべく一つまり、**自分の存在を本当に大事にするために**—「敵を赦し、愛する」ことが必要なのである。

こうした愛敵の精神をドイツの代表的な組織神学者ユルゲン・モルトマンは次のように述べている。少し長くなるが引用したい：

「敵を愛することは、報復するのではなく、**創造することへの愛である。善をもって悪に報いる者は、もはや反発ではなく、何か新しいものをこしらえるのである。**そして、敵を愛することは、怒りや憎しみから解放されること—**自由であること—から生ずる自らの存在に対しての愛と尊厳性が前提とされる。**

敵を愛することは、決して敵に屈服することではない。ましてや、怒りや憎しみを敵に与えることによって、それらを増幅することを意味しない。もしそうなったら、敵を愛する自由な尊厳ある主体は、もはやそこには存在しないことになる。

むしろ問題は、**敵意—敵に対する怒りや憎しみ—の知性的な克服**に他ならない。敵を愛する時、人はもはや『私は、どのようにして敵から身を守り、あるいは、敵の攻撃を脅して止めさせることができるか』とは問わない。むしろ、『**私は、どのようにしたら敵から敵性—怒りや憎しみに基づく相互不信—を取り去ることができるか**』と問う。

敵を愛することによって、私たちは、**敵を私たち自身の責任の中に引き込み、そこにまで私たちの責任の範囲を広げる**のである。それゆえ、敵を愛することは、『**信条倫理**』とは全く別なものである。それこそ、**真の意味の『責任倫理』**に他ならない」

ユルゲン・モルトマン 『J.モルトマン組織神学論叢 3 イエス・キリストの道』

信条倫理と責任倫理は、マックス・ウェーバーの『**職業としての政治**』にて提唱された概念である。

ちなみに、私は、政治を「**狭い意味での政治**」に限定して解してはいない。

学内政治、社内政治、そして、広い意味では、人と人との関係も「**政治**」として含まれるであろう。

こうしたある共同体の中での「**広い意味での政治**」のあり方を、最も象徴しているものが「**狭い意味での政治**」であると解している。

このような「**政治**」への認識にあってこそ、浜口雄幸による「(狭い意味での)政治は(広い意味での政治の範たるべく)最高の道徳を行うものでなければならない」との警句の含意が、よく理解しえるのではなかろうか。

ウェーバーによれば、信条倫理においては、自らの良心に基づき、「**良かれ**」と思う行動を、純粹に、一貫して為すことに価値が置かれる。

他方、責任倫理においては、**起こりうる結果を予見した上で行動し、行動の結果そのものに責任**を取ることに価値が置かれる。

モルトマンが、愛敵を特定の宗教的教義を想定した信条倫理ではなく、責任倫理において論じていることに留意したい。この留意にあって、私はモルトマンの言説を以下のように受け止めた：

敵に対する怒りや憎しみを、愛敵へと転換する自由な意思は、破壊や相互報復の精神ではなく、「**創造性**」の精神に基づく。

そして、「合理的な愛敵」とは、自己自身と敵との双方が、怒りや憎しみに基づく相互不信に陥り、「**(肉体的・精神的)死＝絶望的存在へと至るのを阻止する**」ことである。

また、怒りや憎しみに基づく相互不信を克服する「**尊厳ある生**」とは、「死＝絶望的存在へと至る過程を愛—**存在そのものへの慈しみ**—によって克服する責任」を引き受けた「**自覚的な生**」に他ならない。

繰り返すが、上記のモルトマンの言説にあるよう、「敵を愛する」というのは、白旗を掲げ、敵に屈服することでは決してない。

人には、現在(いま)に生きる—他者や環境、および、共同体を含む—他在、そして、未来に生きる他在のために、より良い世界を「**創造する責任**」がある。

なぜなら、当たり前のことであるが、他在無しに、1人1人の人間は存在しえないからである。

それゆえ—自らの存在と他在を含む—存在を破壊し、軽視するような理不尽な暴力、理不尽な権力に直面した際、自らの生の尊厳を掛けて、それらに抵抗しないといけない局面がある。

しかし、そうした抵抗には、「**知性に基づく、合理的な愛敵の念**」を伴わないといけない。

さもなければ、敵への怒りや恨みに溺れ、「**危害が発生した構造**」を見失う中、敵だけでなく、自らの生もが「**死＝絶望的存在へと至る**」ことにもなりかねない。

「とちめてやろう」という「**安酒の悪酔い**」にも似た狂騒と快哉にあつて、「酔いから醒めた時には何も残ってなかった」ということにだけはならぬよう、モルトマンの言説を改めて自らへの戒めとした上で、本駄文の執筆を終えたい。

2024年4月7日初版(同年同月8日加筆修正)

中島 清貴